

森　　の　　王（承前）

野　崎　辰　巳　譯

11 Artemis と Hippolytus

前述のやうに、たとひ歴史としては無價值だとしても、他の淨刹における祭儀や神話を比較する時、Orestes 及び Hippolytus に關するこの Aricia の古譚は Nemi における歸依の性質を明かならしめる點に價値を有する。ところで、かうした古譚の作者は、何故 Virbius

や森の王の解釋に方つて、Orestes と Hippolytus を拉し來つたのであらうか。Orestes に就いては、その理由は明白である。人血の供御を受けて纔に震怒を鎮め得たこの神や Tauric Diana 神の聖像が、Aricia に於ける殘虐な僧位繼承制度を齎らすに至つたに違ひない。然し Hippolytus に就いては、事相はしかく明瞭で

ない。彼が横死は、その神域の馬を忌む理由を十分直示するものではあるが、單にそれだけの事では、彼と Virbius 乃至森の王との關係は明かでない。吾等は、Hippolytus に關した信仰や古譚神話の類を考察して、更に討覈の歩を進めなければならない。

彼の名高い淨刹は、あの風光の明媚な、殆ど陸地につゝまれた灣頭の Troezen なる祖宗傳來の故園にあつた。今日では、柑橘や檸檬の森が、Hesperides の花園に亭々たる暗黒色の尖塔のやうな糸杉と、そこに嵯峨たる連山一帯の膏腴な裾野を掩うてゐる。靜謐な紺碧をたゞへた灣の彼方に、外洋を隔てゝ浮ぶ島こそ Poseidon の靈地で、その山頂は松の黒みがゝつた翠綠でつゞまれてゐる。

Hippolytus はこの明媚な海邊で信仰された。

その淨域には、上古の神像を安置する一寺院があつた。この神像の祭式は、畢生の奉仕を神に誓つた一僧侶の司るところであつた。

彼の年祭には犠牲の供進があつた。未婚の處女等は號泣と哀歌とを以て彼の横死を追弔しそれに、その結婚に先立つて、黒髪を斷つて彼の伽藍に奉納した。土民等の祕するところではあつたが、彼の墳塋は實は Troezen にあつた。この眉目の秀麗な Hippolytus が Artemis の愛慕を受け、弱年にして夭折し、ために年々處女等の弔祭を受けてゐるといふ、事實は彼も亦うつせみの身を以てして女神の愛慕を受けたといふ、古代宗教に散見する戀愛譚の主人公たることを深く暗示するもので、かうした女神の愛人として最も著名なのは Adonis である。Hippolytus を可愛した Artemis の Phaedra への戀争ひは、やがて Adonis に對する Aphrodite と Proserpina へのそれを胚胎するに至つたといはれてゐる。といふのは、

Phaedra への Aphrodite の化身に過ぎないからである。Euripides の作にかゝる Hippolytus を看ると、この英雄の死に關した悲劇は、明に彼から侮蔑を受けた Aphrodite の憤怒を直寫したものであつて、Phaedra は單にこの女神のツレ役たるに過ぎない。且、Troezen なる Hippolytus の淨域内には、垣間見の Aphrodite (Peeping Aphrodite) を呼ぶ寺院があるが、かうした寺號は、好色な Phaedra が Hippolytus の雄々しい狩姿をいつもこゝから垣間見てゐたためたと謂はれてゐる。もしその垣間見の主が Aphrodite であるならば、かうした名稱が一入ふさしいのは言ふまでもない。加之、この Aphrodite 寺畔には一もとの姫太桃があるが、その葉毎にみえる穿孔は不幸な Phaedra が愛の惱みに堪へかねて、おのが結髪ピンもて穿つたさびである。さて常緑の照葉と紅白の美花と馥郁たる芳香とをもつこの姫太桃は、Aphrodite 自らの樹木であり、更に傳説は、該樹を Adonis の出生に

附會した。Athens では、Hippolytus は亦、暗に Aphrodite に附會されてゐた。といふのは Troezen を見渡す Acropolis の南面に彼を紀念する陵墓が營まれたが、Phaedra の寄進と傳へられる隣接の Aphrodite 寺は、Hippolytus の Aphrodite といふ稱呼であつたからである Troezen にせよ Athens にせよ、彼の墓域はこの愛の女神の祠堂との關聯には、深い意味が寓する。この Asia の大女神の愛人を斂葬したと傳ふる墓域に關しては、後章更に説くであらう。

Artemis と Aphrodite 對 Hippolytus の關係に下したこの觀察にして謬なくば、この兩女神が Troezen に於て櫛に附會されてゐたといふ事實は、相當注意すべきものである。何故ならば、Aphrodite は Askraia なる稱號の下にこの歸依を集めてゐたからで、Askraia とは、實なし櫛といふ意味に外ならない。そして Hippolytus は、Saronno の Artemis 寺即ち『空洞うくうの櫛の Artemis』寺の附近で横死

したかに傳へられてゐた。といふのは、この野生の橄欖樹があつて、彼はこの樹に駢し來つた三輪馬車の轡を引かけたため、終に地上へ投出されたからである。Nemi 神話に見える英雄神 Orestes が、これ亦 Troezen の古譚的歴史に現れて來るのは、偶然のことでない。といふのは、Troezen には、Hippolytus の寄進と傳へられる『狼の Artemis』なる伽藍があつたが、その寺前にある神石は、口碑によると、九男子が立つて、生母弑逆の Orestes にその罪障を祓はしめた跡である。壯嚴な儀式で、彼等は『駒の泉』から引いた清水を使った。そして近く紀元二世期當時まで、この九男子の子孫等は、日を期して、Orestes の小舎で建物の會食を催した。この建物の前庭には、一もとの桂樹が生えてゐたが、その場所こそは彼の祓具を埋藏したところである古代 Greece を知る上に吾等が幾多の啓發を受けてゐる、往古の旅行家 Pausanias は、Hippolytus の『狼の Artemis』寺寄進について、

確たる理由を知り得なかつたが、然し或は、Hippolytus が同地方に陸梁する狼群を掃滅したからのことだつたかもしれないと推斷してゐる。

Hippolytus の神話に於て、尙他に注意すべき點としては、馬に因んだ説話の散見されることである。彼の名は、『戀を緩めた』とか『手綱とく人』とかいふ意味で、彼は Epidauros、なる Aesculapius 神に二十頭の馬を献じた。彼は馬に殺された。『駒の泉』は、恐く、彼の寄進にかゝる『狼の Artemis』寺から程遠からぬ邊りに涌出してゐたのであらう。馬は彼の祖父 Poseidon の神使であつたが、この Poseidon の淨利は入江の彼方に浮ぶ木深い島に聳えてゐたので、今日尙そこの松林はその遺跡をさめてゐる。最後に、Troezen なる Hippolytus の淨域は、馬と狼とに蝨縁ある Diomedes の建立だと傳へられてゐた。その譯は、Adriatic 海頭に棲む Venetia 人は馬の種屬で名高い人種であるが、彼等は、幾多の噴

泉が直に洋々たる Timavus の流れ（今日の Timao 河）となつて涌出してゐる巍峨たる懸崖下に Diomedes の神苑を營んだ。この Timavus 河は靜穩な流れをなして近海に注いでゐる。Venetia 人は、この白馬を Diomedes に献じた。彼の神苑は、Argive Hera や Aetolian Artemis の神苑と地域を同じうしてゐた。是等の神苑に棲つてゐた野獸はその殘忍性を失ひ、鹿も狼と群居したさうである。加之、駿足を以て鳴るこの區の馬匹は狼を描いた烙印を施されたと傳へられてゐる。かうして Hippolytus には種々馬にまつはる蝨縁を見るのであるが、この附會は、單に彼の神域の馬を忌む理由を闡明するのみでなく、Arctia の祭儀の特質をより深く説明するに足るものである。この點に關しては、後章更に論及するであらう。果して彼と狼との關係が Nemi の信仰に或る種の特色を齎すに至つたか否かは、今日まで傳はつた彼地の崇拜に何等狼については聞くところがない以上、吾等は何とも斷

言し得ない。唯この動物が、彼地の神苑に棲む野獸として、Diana の特殊な注意を受けてゐたことだけは、疑ふべくもなからう。

Troezen の少女達が、その結婚に先立つて黒髪の一房を Hippolytus に奉納するといふ習慣は、この神と結婚との關係を示すものであるが、かうした關係は、一見彼の終始した獨身生活に對する人氣とは相容れない觀がある Lucian の記すところによれば、Troezen に於ては、青年も處女も、Hippolytus にその毛髪を奉納しない限り、結婚する譯には行かなかつた。そして、剪りとられた青年の毛髪がその産毛ながらの顎髯だつたことは、彼の記載から判せられるのである。然しこれは大したことでない。かうした習俗は、Greece でも東洋でも行はれてゐたものらしい。Plutarch の説では、Delphi に赴つて Apollo に毛髪を奉獻するのは、夙に思春期の少年等が常習とするところで、Hippolytus の父 Theseus も亦、有史時代まで傳承されたこの土俗を履んだ一

人であつた。成熟した Argive の處女等は、結婚する前に、その毛髪を Athena に奉獻した。Megaris の乙女達も、是亦結婚に先立つて、處女神 Iphioe の墓家に奠酒を灌ぎ、その毛髪を斷つて供進した。Delos 島なる Artemis 寺の山門には、兩乙女の墓石が橄欖の樹蔭に並んでゐた。この乙女達は、往昔 Apollo へ祈願があつて、はるかな北國から巡禮して來たのであるが、終にこの靈地で他界したため、こゝに葬つたのだと傳へられてゐた。結婚前なる Delos 島の處女達は、頭髪の一房を斷つて紡錘にかけ、それをこの乙女塚に供へた。青年等も同様で、唯その産毛ながらの顎髯を、一莖の草穂か一條の綠楚にからませて進めた。Artemis も亦、こゝかしこで、未婚の處女達から毛髪の奉納を受けてゐた。Caria の Panamara では、男子は Zeus の伽藍に握の毛髪を奉納した。これは小さな石筐に秘められたが、この石筐の中には、大理石をその蓋としたものがあり、且、奉納者の氏名が、

當時の僧名と共に、石面の方形をした凹處に刻まれてゐた。かうした彫刻ある石筐が、近年こゝから夥しく發見された。然しどれ一つ婦人の名を刻したものとてはなく、中には父子の連名の見えるものもある。Hera も亦 Panamara では信仰されはしたが、然しかうした奉納品は、すべて Zeus へのみ献せられたものである。Euphrates 河の Hierapolis では、青年は髯を少女は髪を Syria の大女神に供へたので、氏名を刻して該女神の祠堂の壁上に釘づけられた金乃至銀製の手筐の中に、その毛髪は枯死したまゝ残つてゐる。この産毛ながらの顎髯を奉納する風習は、帝政時代の Rome に於ても普通のことだつたらしい。されば Nero も、高貴な眞珠を鏤めた金筐の中に、その顎髯を秘めて Capitol に奉納した。かうした風習の解釋に方つて、一道の光明を投じるものは、兩種の東洋古代の風俗、即ち Egypt と Phoenicia との慣習であらう。Egypt では少年少女の病が癒えると、その父

母は愛兒の頭髮を剪つて金銀に易へ、この貴重な金屬を聖獸の看守に授ける。すると看守は、それで聖獸の嗜好する食物を求めて施與するのであつた。その嗜好は動物の性情によつて違ひもしたし、又その動物も、教區教區でまちまちであつた。鷹の信仰されるころでは、看守は肉を刻んで、大聲に鷹を呼ば、りながら、鷹が舞ひ下つて肉片を啄むまで、空高く肉塊を投げた。猫、鼬乃至魚類を土地の神とする地方では、パンを牛乳の中で碎いてかうした動物にあてがふか、さなくば Nile 河にそれを流した。他の神苑とて同様であるかうして Egypt では、毛髪の奉納は聖獸に食を施すことゝなつて終つた。

この習俗も、Byblus なる Phoenicia の大女神 Astarte の靈場では、その趣が違つてゐた。こゝで例年行はれた Adonis 追弔の會式には、婦人は頭髮を削らなくてはならなかつたが、それを拒めば、異邦の男子と仇し枕を交してその勞銀を神に捧げなくてはならなかつた。

こゝのかうした風俗を記載してゐる Lucian は、さうとは明言はしないけれど、件の婦人が一般に處女らしいことや、信仰に即したこの行爲が結婚の豫習として必要とされてゐたらしいことは、想像するに難くない。あらゆる場合に於て、女神に對する貞操の奉納が毛髪の上に代るものなのは、極めて明かなことである。といふのは、後述するやうに、多くの民族間では、毛髪は或る意味に於て精力の象徴と考へられてゐたからで、殊に青年期に於ては、それが生活力の分派に外ならぬものと思惟され得たからである。蓋し妙齡期にあつては、毛髪は、種族増殖の爲に享受した新精氣の外的兆候又は顯現に外ならない。かうした理由から推せば、男性は寧ろ、頭髮よりも鬚髯を擇んだらうとは臆測するに餘りある。こゝに於てか、Byblus の奉納物は、その由來が明かになつた。即ち毛髪にせよ貞操にせよ、その奉納は畢竟生殖力を女神に附與することに外ならない。然し、多産と愛慾と

を司るこの大女神 Ashtaré へ、何の理由で彼女等はいかにした奉納物を捧げるのであらう。女神は何の必要から、かうした信者達から生殖力を受けたのであらう。それは寧ろ、女神から信者達へ授けらるべきではなかつたか。この疑問は、往々吾人をして、古代宗教について概説し得るかの多神教の主要な點を看過せしめるものである。が神は、信者が神を必要とすると同様、彼自體も信者を必要とするその授福は相互的である。自ら地球を創成して、鳥群獸群の果しらぬ生殖と人類種族の限りない繁榮とを造始したとはいへ、神は、かうした神慮が、十分一税乃至調貢の形式の下に、自己へ報謝さるべきだと期待した。この十分一税こそ、神自體がその身を托したところで、これなくば、彼等は唯餓死するのみであつたらう。神とても糧を要する。彼等神の生産力精力とて、その保持には補ひを必要とする。人間が神に肉と飲料とを薦め、併せて男子としては最も男性的なものを、又女子と

しては最も女性的なものを、各々神恩に對して奉獻したのは、かうした譯からである。がこの後者の供獻は、宗教史家の往々にして看過若くは誤解したところであつた。これに關した幾多の例證は、本考察の進捗とともに、指摘されるであらう。同時に、その毛髪を奉納した婦人達が、この機縁に促された *Astarte* 神との交感を通じてその授福を渴仰したといふことも間違ひではあるまい。實際婦人等は神靈の生殖力に觸れることによつて、自己の生殖力を享受しようとしたのであつた。そして貞操の犠牲が、是亦同様な動機に由來してゐることも、想像に餘りある。

毛髪の奉納、殊に思春期のそれが、かくあることによつて神の榮養を助け、かくて靈驗のあらたかならんことを祈請してのことだとすれば、幽冥界への毛髪奉納などいふこの種の習俗のみでなく、かの *Puigalia* なる *Arcadia* の少年等が、該市の脚下に横はる蓊鬱たる澗底の奔流に試みるやうな、河川へ毛髪を奉納

する *Greece* の風習をも、釋解することが出来る。蓋し、降雨と日光とに亞いで、河川はご一國の土壤を肥沃にするものは、自然界には明に他にないからである。却說この解釋は橄欖樹下なる乙女塚に毛髪をさへげた、かの *Delos* の青年處女等の風習を説明するものである。即ち、*Delos* 島では、*Delphi* 同様、豊穰を施して倉廩の充實を司るのが *Apollo* の一神徳で、隨て收穫期に方つて十分一税として奉納されるものは、稻穂の形態を具して各地から寄進された。その中で、特に神慮に叶うたのは、黄金からなる稻の穂で、『黄金の夏』なる稱呼の下に行はれたものである。かうした神嘗かんめの年祭は、今日の五月二十四五兩日に該當する、收穫月 *Thargelion* の六七兩日に行はれたが、それは *Artemis* と *Apollo* とのそれ／＼の降誕日だつたからである。*Hesiod* の在世當時には、欽禱は七曜星の出現する晨に始まつた。今日の五月九日に相當する日である。そして、當時の *Greece* における小麥の

成熟は、今日のそれと大差はない。該神はこれを納受した應酬として、Delosより Delphi への大伽藍から清淨な神火を頒つたが、それは恰も中心太陽のやうに、光と熱といふ神恵を輻射するものに外ならない。この神火は、例年一船によつて Delos から Lemnos へ齎された。そこは火神 Hephaestus の靈域で、彼地のあらゆる火は滅せられ、この神火の着御を待つて、その淨火もて再び點せられた。Delphi から Athens へわたるこの淨火の遷御

は、壯麗華美を極めた儀式であつた。Athens の奉行等は、その爲にすべて Delphi へ赴いた。神火は馬車上の寶鼎に燃え燵つて、火焚き女と呼ばれた婦人の齋くところであつた。歩騎の兩兵が警衛した。僧侶奉行傳令官も扈從した。鹵簿は喇叭と横笛との吹奏裡に進んだ。この Delphi から Athens への神火遷御が、何が故にかうまで嚴修されたかは不明である。がそれは、かの雷神 Zeus の爐邊に侍して下界を照覽する Athens なる Apollo の

巫尼達か Parnes 山上なる Harma の空に電光を認めた時だつたとは、想像するに難くない何故ならば、その時彼女等は Delphi に敬供を進め、その報謝として神火を頒たれたからである。Persia 人が Plataea に敗衄するや、該市民は蠻夷の亂入による褻瀆を感じて、あらゆる國中の火を滅した。そして、かくして後彼等は、急使を Delphi にはせ、その公竈の聖壇から新しい淨火を齎して、再び國中の火を點じたのであつた。

さて、Delos の青年少女が毛髪をさへげたといふこの墓冢の主は、北方の常世國 (Hyperboreans) から麥藁苞の新穀をはるく齎し來て敬供した後、この靈地で他界したと傳へられてゐた。だから俚俗は、年々歌舞を以て黄色の禾束を Delos に薦める信者團の神話的代表者として、彼女等を信じてゐた。が實際、以前はそれ位のことではなかつた。といふのは、彼女等の名だつて Heliaerge と Opis とが、元來 Artemis 自體の複名に外ならな

つたとは、現代學者が研究の結果、蓋然的に決定したところである。否々單にそればかりではない。何故といへば、この當世乙女の一人は、時には女性にあらぬ男子として、Apolloの俗稱なるかの遠の獵人（Far-shoot）として散見するからである。この事實は、この兩者が元來 Apollo 並に Artemis なる天界の雙生兒に外ならぬ所以を暗示すると共に、併せて、Artemis 伽藍の、一は堂前に他は堂背にあつた Delos なるこの兩墓家が、當初は、かうした兩大神の陵墓だつたかもしれない所以を語るもので、かくしてこの兩大神は、この生地に鎮座したのであつたらう。この墓家の一つは毛髮の奉納を見、他は聖壇上の犠牲の焚灰を納受する。この兩種の敬供は、吾等の推定にして謬りなくば、豊穰を地上に齎す神德をして強大ならしめむ爲の企圖であつたらう。そしてかうした威德をもつ神の骨舍利は、奇瑞を示すあの中世期の聖者の遺骨同様、その幸福な祕藏者に福德を授けた。古代人の信仰

は、神のおくつきが人界にあればとて、動搖はしなかつた。Apolloの塋域は、同じく彼を祀る Delphi の伽藍に現はれたが、この事はやがて、Delos なる彼の陵墓の湮滅を語るものであらう。本尊を同じうするこの兩刹の僧侶等は、一柱の神に二ヶ所の墓域は不必要だし奇特な信者は別として、一般には、かうしたことは却つて衆俗の歸依を散する所以だと考へた。この周到な意圖を實現すべく、彼等は文法上 Helaeiros が Helaeiros に容易く改竄さるべきことを看取して、さうくも Delos なる該神の陵墓をかの清淨な少女の墓家に變改すると共に、Apollo 入滅を Delphi のことゝ由緒づけて、各寺ともに、かうした聖塋に對するその所有上の要求を満足せしめたものらしい。

然し、かうしたすべてが、かうして Hippolytus にとつて妥當なことなのであらうか。村娘に身も魂も打込んだ一人の鰥男の墓家にかくまで奉納品の山積を見るのは何のため

であるか。いかなる種子なればこそ、さうした
礫の荒土にかくまで芽を吹いたのであつた
らう。この問題は、Diana 乃至 Artemis を、
狩獵に趣味をもつ操守の淑女とする現代人の
通俗的概念を示すものであるが。いかなる概
念でも眞實を離れては成立しない。古代人に
とつては、彼女は反對に、自然の無限な生滅
を示すその如實の生命——草木、禽獸、人類
の生命——の觀念であり、體現であつた。獨
逸の一近著は篤論していふ。

自然の大女神は、古來 Greece の隨處に崇
拜された。彼女は山嶺においても藪澤の中
でも風に囁く木立の奥でも沸々たる鳴泉の
かたへでも祠られた。Greece 人は隨處に彼
女の妙機を感じた。彼等は、牧場の草萌え
にも五穀の豊穰にも、否更に、森林曠野に
棲息する野獸、使役のために馴養された家
畜、乃至は搖籃に生長する人間自らの子孫
など地上のあらゆる生物の健全な體力にも
この女神の慈惠を感じた。彼等は、彼女の

破壊的な赫怒を、草木の凋枯に、おのが田
畝果樹園における野獸の侵入に、生命の悲
し、臨終に、死に認識した。この神は、土
地を女神とするやうな、そんな空虚な觀念
の神格化ではなかつた。何故といへば、か
うした抽象化は、あらゆる原始宗教に對し
ては殆ど交渉のないものだからである。彼
女は萬有を抱擁する自然力であり、その鎮
守した地域や、その大悲或は大慈の容顔に
見える特殊相や、乃至はその神德の特に尊
信された部面などの關係から、たとひその
神號を異にしようとも、彼女が隨處におけ
る崇拜の對象たるには渝りなかつた。そし
てあらゆる自然界の生物を男女の兩性に別
つた Greece 人は、この女性的な自然力を、
男性的のそれと對立させないでは、想像す
ることが出来なかつた。かうした譯で、彼
女に寄せられた古代人の歸依の中には、口
碑の異なるに隨つてその神號は區々である
けれども、とにかく同一性質の男性的自然

神が Artemis に配られてゐるのを發見する例へば、Laconia に於ては古代 Peloponnesia 神 Karneios が配られ、Arcadia に於ては一再ならず Poseidon が對偶とされたが、他地方でも、Zeus Apollo Dionysus 以下の諸神が Artemis の偶成神であつた。

ゐる Artemis に適用される言葉で、普通處女と翻譯される parthenos なる語は、獨身婦人といふ以外には實際他の意味はない。そして上代に於ては、この兩者は決して同一物ではなかつたのである。人間における徳性の發達につれ、道德の嚴則は神祇の上にも科せられるに至つた。さればかうした神々の殘虐點詐、貪婪を傳へる説話は、神威の褻瀆だとして、粉飾されるかさなくば抹殺されなくてはならない。曾ては天下を横行した當時の無頼の徒も、かくてその蹂躪し去つた法律の拘束するところとなる。Artemis をてこの選に洩れずこの曖昧な Puthenos なる稱呼とて、その通稱たるにとゞまり、その正體を示す名號では

ない。Farnell 博士が斷定したやうに、Artemis は處女神としては衆俗の歸依を集めてゐなかつたので、性に因みあるその幾多の神號から推せば、寧ろ反對に、Italy の Diana 同様、童貞の喪失と兒女が多産とに深い齟齬がありそして單に分娩産兒に冥護を垂れたのみでなく、これを獎勵してゐた形跡さへ窺はれる。Euripides の口吻を藉りて云へば、産婆としての彼女は、石女には唾もひつかけないであらう。のみならず、彼女の名號乃至靈能の暗示が、その安産神たることを明示するに引換へ結婚の司神としては何等確乎たる理由が認められないのは、意味深長である。然し、賽客繁昌の靈場に奢靡な儀式を以て信仰され、未婚ではあるが童貞ではない、司婚安産の Asia 女神と同體だとする臆斷ほど、結ぶの神ではなかつたが子授けの女神だつた Artemis の眞神格を、明示するものはない。圓滿具足した彼女の母性は、その祠堂として最も名高い、Ephesus の伽藍なる本尊が、遺憾なく表出し

てゐた。その模像は今日まで傳つてゐるが、それはいづれも、細節に多少の異同を見るのみで、主要な特徴は同一である。それは數多の胸乳を搔出した形像で、乳房から脚下へ及ぶ幾筋もの垂帶裏へ、野獸家畜の群類がその首を突入れてをり、そして蜂や薔薇を始めとして時には胡蝶までが、その腰部以下の側面を飾つてゐる。かうして彼女の胎内から生れ出るかと思える群獸は、その模像の異なるにつれて異なつてをり、獅子牡牛牡鹿馬山羊羯羊などいろいろである。のみならず、獅子が彼女の二の腕に睡つてゐるものもあるし、僅か一體ではあるが、蛇が一の腕にまづはつてゐるものもある。その胸は花環で飾られ、領のあたりは襪實の首飾をつけてゐる。又ある一體を見ると、その外衣の胸部は、羽翼ある兩男子が雙手に禾束を捧げてゐる形象で飾られてゐる。が、是等の注意すべき神像以上に、彼女の豐饒な生産力と強健な生殖力との、より表現的な象徴を工夫するのは、困難であらう

Ephesia に於て、宮を斷つた比丘と童貞の比丘尼とに齋かれる Artemis は、明かに東洋神であつて、その信仰は Greece の移民等が蠻族から傳へた者である。唯彼等が該神を傳來して自國の Artemis に合體せしめたといふ事は、この Greece の Artemis が亦 Asia におけるその姉妹神同様、根本的には自然の生産力を人格化したに過ぎないものなる所以を、明示するものである。

さて本論の Troezen に立歸つて、若し Hippolytus と Artemis との關係が、曾ては古典文學に現はれる以上に微妙な性質のものだつたと想定するならば、吾等は、この兩神の何れをも不公平に扱ふ譯には行かない。たとひ彼が婦人の愛慕を斥けたとはいへ、それが一女神の狎寵を享けようとしたためであるとは推測するに難くない。古代宗教の原理からいへば、自然を多産的ならしめるを以てその職能とする以上、まづ彼女自體が多産的なるを要するとともに、その爲には男性の配偶をも

必要とする。この觀察にして謬りなくば、Hippolytus は Troezen における Artemis 神の伉儷であり、Troezen なる未婚の青年處女が奉納した毛髪は、この男女兩神の和合を固めよつて以て五穀の豐穰、家畜の蕃殖、子孫の繁榮を促さんための工夫に外ならない。Troezen なる Hippolytus の淨域に、Diana 及び Annesia と名づくる二種の女性的精力が信仰されてゐたといふ事實は、この論斷に相當の確證を與へるもので、この兩者と土壤の生産力との結合は、疑ふ餘地がない。Epidauros が飢饉に陥つた時、市民は神話に聽いて橄欖の神苑外に Diana と Annesia との兩神像を刻んだが、功成つてそれを安置するや否や、收穫は忽ち舊態に復した。のみならず、Troezen その地の、而も Hippolytus の淨域裡においては、投石の奇習を以て彼女を祀りその祈願を籠めるのであるが豐穰を祈る明白な目的の下に、これに類似した風俗が各處に行はれてゐたといふ事實は例證するに難くない。青春

の Hippolytus の悲劇的死を語る説話の中には、秀麗なこの現し世の若人が不死の女神の狎愛に恍惚としてその身を捐てた古譚と、同様の點が認められる。かうした薄命の愛人は必しも單なる神話ではない。堇花の紫、アネモネの深紅、薔薇の猖々緋が、かうした愛人の淋漓たる鮮血から咲き出でたとする幾多の古譚は、夏咲く花にもたとふべき青年佳人のはかなさを歌つた無益の寓言ではない。かうした寓話は、自然對人生の深い哲理——悲慘な風習を生む悲哀な哲理——を内容とするものである。その哲理その風習の何であつたかは、後章更に論述するであらう。

三、撮 要

今や吾等は、Artemis の偶成神 Hippolytus が古代人からは Virgins と同一視されてゐた理由を了解し得たやうであるが Servius に従へば、Adonis の Venus における或は Attis の Cybele におけると同様、彼は Diana の狎愛

を受けたのである。といふのは Diana も亦 Artemis と同じく、一般には生産を司り、特殊的には子授けの女神だつたからである。かうした譯から、彼女は、Greece におけるおのが化身と同様、男性の配偶を必要としたのであつて、Servius の所論にして謬りなくば、その偶成神は Virbius である。神苑の開基であり Nemi 王の高祖だといふ點からいつて、Virbius は明に、かの森の王と呼ばれて Diana に奉仕し、是亦歷代不自然な最後を遂げた僧侶等の、神話的始祖であり原型である。随つて僧侶等が、Virbius と同様な態度でこの女神に對してゐたと推測するのは、無理でない。約言すれば、現し身ながらも森の王は、おのが后妃として Diana に接してゐたのである。若しその生命を賭して守護に任じたかの神木が、果して彼女の特種な化身と思惟されてゐたとすれば、僧侶は、おのが女神として該樹を崇拜したにとゞまらず、おのが伉儷として抱擁したかもしれない。蓋しかうした想像は

決して不合理なものではない。何故ならば、Pliny の在世當時ですら、Alban 丘陵なる Diana 神苑の美しい山毛櫸にかうした態度を見せた Rome の貴族がある位だからである。彼は該樹を抱擁し接吻し、その樹蔭に臥し、その樹幹に酒を灌いだ。彼は明かに同樹を女神と考へた。男女が樹木と結ぶ肉體的結婚の風習は今日尙 India を始め東洋の他地方に行はれてゐる。果して然らば、古代の Latium に限つてその行はれなかつた理由はない。

總括的な證憑再閲の結果、Nemi の神苑における Diana の尊信は非常に重要にして且甚しく古代のものに屬すること、彼女は森林野獸を始め恐くは家畜收穫をも司る女神として崇拜されてゐたこと、又子なき男女に子を授け産褥裡の婦人を擁護する神として信じられてゐたこと、未婚の祭尼の齋きまもつた彼女の神火はその淨域の圓筒寺院に久遠の炎を揚げてゐたこと、産婦に加護を垂れて Diana の功德の一半を辨じ又 Rome の古王と神苑に同

棲したかに傳へられる一水精 Egeria が彼女との合體神であること、更に Venus が Adonis を愛し、Cybele が Attis を寵したと同様彼女も亦男性の匹偶として Virbius を有してゐたこと、そして最後に、この神話上の Virbius は有史時代に再誕してかの森の王として知られた僧侶の系譜に現はれたこと、その僧位の繼承は必ず兎刃による篡奪に俟つたこと、該僧侶の生命は云はゞ淨域なる一神樹の左右するところで該樹に傷害が加へられない間は僧侶も亦弑逆を免れたこと、等を推斷し得る。

この薄倖な時代の奇しきかたみとして今日に傳はるものは、Zenit の淨域で發見された一體兩面の胸像である。これはやゝ野鄙なおろかしい容貌の二人男で兎惡な表情をしたものである。兩頭とも同一型ではあるが、其間著しい差異が認められる。即ち、一方は口を結んで深い凝視をついてゐる無髯の若い顔であるが、他はおどろした眼付きをして齒をむきだした髯蓬々たる中年男の顰め面であ

る。が、この兩面について最も奇妙なのは、兩者の首を始め殊に年若な方の眼の下に膏藥を貼つたとてもいひたいやうに見立つ扇形の樹葉である。これは解の葉だと説かれてゐたそしてこの疑ふべくもない解釋は、側面から眺めた時に中年男の髯が明かに見せる一片の樹葉との類似によつて、更に確證されてゐるこの注意すべき遺物について、種々の解説が施された。然しその中で、中年男は森の王なる Zenit の僧侶の面貌であり、残る一面は、彼の敵手にしてその年若な繼承者の容顏だとする見解が卓論である。この見解は、Greco 人でも Rome 種でもなく、明かにその蠻民たることを示してゐるかの兩頭面の野鄙な遲鈍な型の由來を説明する。蓋し Zenit の僧侶が逃亡してゐた土隸たることを條件とした以上森の王は大抵未開な他種族の人間であつたからである。加之、この見解は、深い覺悟を示してゐる青年の凝視と中年男の憔悴畏怖の状态との著しい對照を説明するものである。即

ち、一は殺人の決意を示してをり、他は死の恐怖を表はしてゐる。尙最後として、この見解は、兩者の首と胸とにまつはる屍衣のやうな木の葉の由來を極めて平易に説明するといふのは後述のやうに、Zemi の僧侶がおのが齋く神木の權化として信じられてゐたらしいのみでなく、木精の化身がおのが木の葉で粉飾されるのは、最も自然な經路だからである故に、兩頭像に見えるこの樹葉が果して櫛の葉であるならば、森の王の本地身ともいふべきかの神木は、櫛の樹だつたと斷せられなくてはならない。尙、その然る所以を語る獨自の理由は他にも多々あるが、その考察は暫く措かれなくてはならない。

如上の結論だけでは、僧位繼承の奇しき制度を説明するには、決して十分でない。然し更に範圍をひろめて他を涉獵することは、該問題の解釋上、一關鍵を握る所以である。されば今や吾等はその準備に着手しなければならぬ。前途は多艱であらう。然しかうした

發見の航海には、幾多の興味と魅力とが懸つてゐる。吾等はこの航海において、奇しき土民とより奇しき風俗とを有する幾多の奇しき異國を訪ふであらう。風は追風である。吾等は高く帆を揚げて、暫し Italy と訣別しよう。(完)